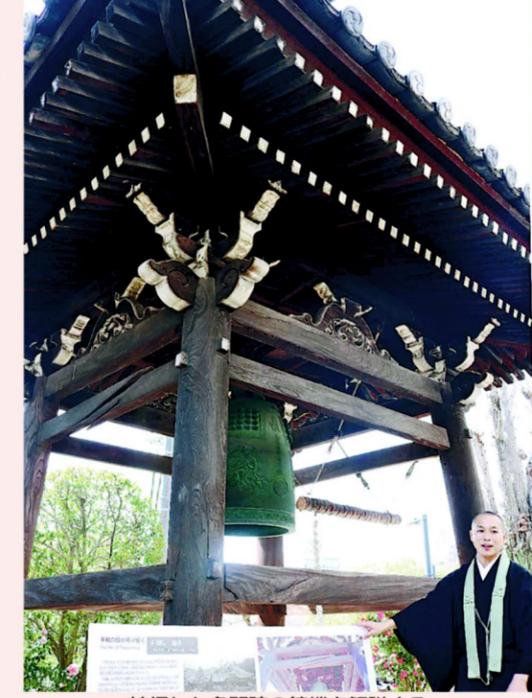




△ヒース・シース▽
平和や命の大切さをいろんな視点から捉え、広げていく「種」が「ヒース・シース」です。世界中に笑顔の花をたくさん咲かせるため、中学、高校生の25人が自らテーマを考え、取材し、執筆しています。

第55号 比治山で学ぶ平和

① 多聞院



被爆した多聞院の鐘楼を解説する亀尾さん(撮影・高1川岸言織)

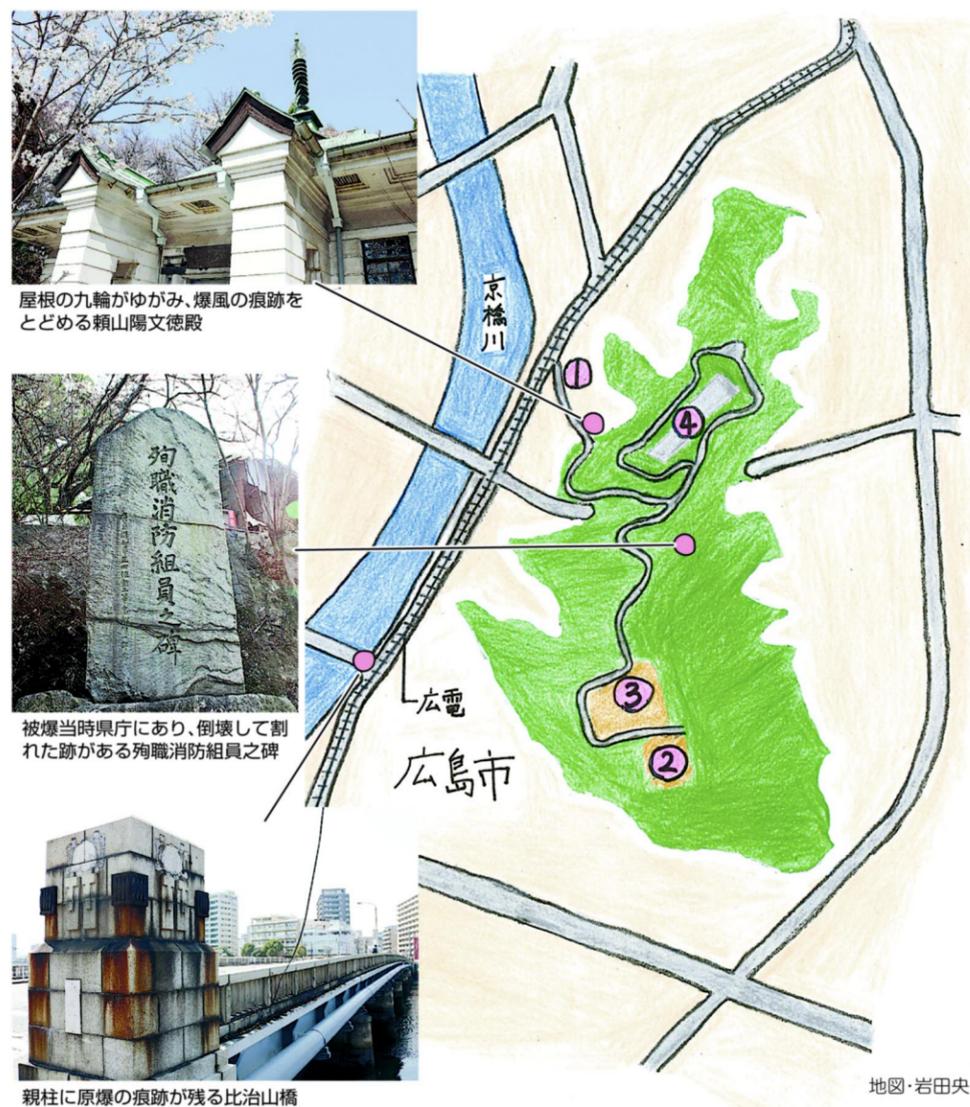
比治山のふもとに立つ多聞院は、爆心地から1.75kmにあり、原爆が投下された1945年8月6日には臨時の県防空本部が設置された。本堂や庫裏は大破しましたが、34年にできた鐘楼は爆風に耐え、大切に保存されてきました。破れた屋根や折れたはりが、惨状を伝えています。戦争中の物不足で仏具と一緒に回収されたため、鐘は

被爆した時にはありませんでした。しかし49年、当時の住職さんが爆心地の砂を混ぜた「平和の鐘」を設置。その表面には「NO MORE IROSHIMAS」という文字が刻まれています。現在は副住職の亀尾泰弘さん(35)が毎朝8時15分に鐘を鳴らしています。亀尾さんは「8月6日が近づくと、鐘を

原爆耐えた鐘楼 惨状語る

ると言います。当たり前前の生活が一変し、突然全てを奪われた「あの日」の朝を現実味を帯びて感じるそうです。私も鐘をつきました。音が

おなかに響き、心地よい余韻が残りました。「一人でも多くの人が、8時15分を意識してもらえれば」と亀尾さん。多聞院の鐘の音は平和への願いを伝えます。(高3沖野加奈)



地図・岩田央



戦没者が埋葬されている陸軍墓地(撮影・岩田央)

② 比治山陸軍墓地

兵士の犠牲 風化させまい

比治山陸軍墓地は1872年に陸軍の埋葬地として設置され、西南戦争(77年)以降の戦死者の遺骨を葬っていました。墓石は1944年に整理されましたが、原爆投下や枕崎台風の影響で、戦後しばらく散乱したままだったそうです。
桜並木に囲まれた現在の墓地は、60年に有志によって再建されました。県別に整理された墓石が左右にすらりと並び、日清戦争や第1次世界大戦などで亡くなったフランス、ドイツ、中国人の墓や、さまざまな慰霊碑もあります。
今回初めて墓地を歩きました。一つの墓石が、散っていった兵士の存在を示しています。風化させまいという強い意志のようなものを感じました。比治山には原爆を伝える史跡がたくさんあります。陸軍墓地は原爆とは違う視点から、戦争の悲しさを伝えていきます。(高1斉藤幸歩)

③ 放射線影響研究所

被爆者の健康調査続く



放影研の歴史を学ぶジュニアライター(撮影・高1伊藤淳仁)

放射線影響研究所(放影研)は、米国の原爆傷害調査委員会(ABCC)が前身です。1947年に広島赤十字病院の中に開かれ、50年に比治山の上に今の建物が完成しました。広島市内の平地は水害が多く、ここが選ばれたそうです。75年に日米が共同で運営する研究機関になりました。
かつては被爆した子どもや少女がいやがっているも検診し、被爆者の遺体を解剖して「被爆者の調査はしても治療はしない」という批判や反発があったと聞きます。放影研広報出版室長のジェフリー・ハートさん(58)は「研究機関なので治療が目的ではない。しかし、無理やり子どもが連れて来られたことなどを聞くと、ひどいと思うし、複雑な気持ちだ」と話します。
58年以降は被爆者の死因や寿命の調査も始めました。そのデータを基に、医療などで使われる放射線被曝の基準が決まりました。ハートさんは「被爆者の協力で、放射線のさまざまな研究が発展した」と力を込めます。
放影研は、被爆者の健康状態や被爆2世への影響がないかなどを調査しています。若い世代との交流にも力を入れ、出前講座や「フェイスブック」でも情報を発信しています。施設を見学し、放影研の歴史と現状がよく分かりました。(高3岩田央)

④ 広島市現代美術館

オノ・ヨーコさんの作品 衝撃

比治山の広島市現代美術館は1989年に開館しました。各国の芸術家が制作した原爆や戦争、平和をテーマにした作品をたくさん展示しています。
オノ・ヨーコさんの「箱」は、被爆50年に作られたオノ・ヨーコさんの「箱」は、血のにじむ小さな箱と「痛みから逃げられない」と訴える詩が、被爆者の終わらない苦しみを表現しています。作品を眺めていると早くこの場を去りたいと思うとともに、実際に傷を負った人はずっとこの重みを抱えているんだ、と感じました。
美術館の玄関の天井は爆心地の方向に切れ目があるデザインで、柱の一部に被爆石が使われています。平和と向き合える美術館だと思っています。(高2藤井志穂)